

ロシア字ローマ字化翻字法の標準化について

古賀義顕

【表1】ローマ字によるロシア字翻字法各種²

はじめに

近年の印刷所はほとんどの場合ロシア字（現代ロシア語で用いられるキリル文字を以下こう呼ぶ）による入出力に対応できるため、原稿の作成に際してロシア字をローマ字で表す（翻字する）必要に迫られることはかなり少なくなったように見受けるが、現在もなおロシア字を翻字せねばならない機会がままあることはロシア語学・ロシア文学の関係者がいちばんよく知っている。にもかかわらず今日まで日本ロシア文学会は一貫した翻字法を方針としても設けておらず、学問的見地から十分吟味され、かつ自信をもって公共の実用に供しうる合理的な翻字法を私たちがいまだに持たないのはやはり憂慮すべきことのように思える。

こうした中、碩学川上泰教授により日本音声学会の『音声学会会報』（193号）において「実用明解ロシア字ローマ字化案」と称するきわめてエレガントな翻字法が提案されたのはまことに慶賀すべきことであった。この川上式翻字案（川上1990a）をめぐっては、その後同学会会員の幾人かの方々がレビュー論文を寄せ、またそれらに対して川上氏（川上1990b）が所感を寄せるというかたちでいったん収束し、その後同学会においても、ローマ字による公式のロシア字翻字法が制定されたという話はなかったようである。また、この瞳目すべき翻字方式が日本ロシア文学会において検討吟味されたという話も寡聞にして知らない。かくいう筆者もこの翻字案についてはたまたま知ったにすぎず、管見を恥じる立場である。

本稿ではこの欠を埋めるため、現時点で考える合理的な翻字方法の考察をもって、本学会に公式な標準ロシア字翻字法の制定を提議したい。世界に誇りうる川上式翻字法をこのまま埋もれさせるのは惜しく、またロシア字を翻字する際に既存の、ときに深刻な欠陥を含む翻字法に無批判に依拠しては本邦のロシア語学界はその主体性さえおぼつかないのではないかという二重の危惧から筆を執るしだいである。¹以下ではまず川上式翻字法の概略を紹介し、それから私の立場からの小さな変更について述べる。本稿が最終的に推奨する翻字法は【表2】のとおりである。

ロシア字	名称	川上式	RJ	BM	ALA-LC	INIS	GOST
А а	アー	a	a				
Б б	ベー	b	b				
В в	ヴェー	v	v				
Г г	ゲー	g	g				
Д д	デー	d	d				
Е е	イェー	e	e				
Ё ё	ヨー	yo		e	ë	e	jo
Ж ж	ジュー	zh	zh				
З з	ゼー	z	z				
И и	イー	i	i				
Й й	短いイー	j	j	i	ï	j	jj
К к	カー	k	k				
Л л	エリ	l	l				
М м	エム	m	m				
Н н	エヌ	n	n				
О о	オー	o	o				
П п	ペー	p	p				
Р р	エル	r	r				
С с	エス	s	s				
Т т	テー	t	t				
У у	ウー	u	u				
Ф ф	エフ	f	f				
Х х	ハー	x	x	kh	kh	kh	kh
Ц ц	ツェー	c	c	ts	ts̃	ts	c
Ч ч	チェー	ch	ch				
Ш ш	シャー	sh	sh				
Щ щ	シチャー	sq	hh	shch	shch	shch	shh
Ъ ъ	硬音記号	·	w	無視	”	”	”
Ы ы	ウィ	ih	y	ui	y	y	y
Ь ь	軟音記号	j	j	·	·	·	·
Э э	エー	eh	eh	e	è	eh	eh
Ю ю	ユー	yu	ju	yu	iū	yu	ju
Я я	ヤー	ya	ja	ya	iā	ya	ja

Key

川上式 : 川上 (1990a)

RJ : Jakobson (1971[1965])³ 以下順不同BM : 大英博物館方式 (1936-75年)⁴ALA-LC : 米国図書館協会・議会図書館方式 (1997年)⁵

INIS : 国際原子力情報システム規格

GOST : ロシア国定規格 (2002年)⁶

1. 川上式翻字法

川上氏の提案する翻字法とその他の(補助符号を極力使わない)主な翻字法を対照した【表1】を参照されたい。ы(ウイ)をihとし, ш(シチャー)をsqとするなど, 川上式翻字法に抵抗を感じる向きもあるかもしれないが, その設定過程を冷静に吟味すれば, それがいかに合理的であるかがしだいに理解されると思う。その他の一見奇異に見える字母の翻字についても, いずれもかつて提案されたもの, あるいは他の翻字法で実際に使用されているものである。では, 川上式翻字法のオリジナリティーはこの2文字の翻字を考案したことにのみあるかといえ, それは事実ではない。私見では, 川上式翻字案の最大の特徴は翻字設定の際のその原理的な一貫性にある。まず何よりも川上氏の論文全4頁を直接参照されることが望ましく, また川上論文に注意を喚起するだけでも本稿筆者の目的はなかば以上達せられるのだが, 本誌と同様きわめて専門的な学会誌の論文であるため, ここに改めて川上氏の論旨を祖述しておくのは無駄ではない。以下, 私が消化しえたかぎり川上氏の考え方に従って翻字の方針を解説するが, 例などにつき川上氏とまったくおなじ言い方をしているわけではなく, 私の誤解や曲解もまぎれこんでいるかもしれない。責任が私にあることは無論, あらかじめご容赦いただきたい。

1. 1. 翻字の方針

川上氏は翻字を設定する際, きわめて簡潔かつ明確な基本方針に基づき, それぞれのバランスを加味しながら, 翻字に際して常に問題となるロシア字をどのように翻字すべきかを順を追って具体的に決めていく。その翻字方針とはおおよそ次のようなものである:

- (1) 補助符号を使わず, 既存のローマ字を用いること
- (2) 翻字の復元が可能かつ容易であること
- (3) 構造的かつ体系的であること
- (4) 経済的であること

この4つの方針について簡単に説明しておこう。

まず(1)の方針は, 補助符号の使用を避けることで入力と印刷の便宜をはかろうというものであり, 「翻字の入出力が容易であること」と言い換えてもいい。印刷の便宜を第一に考える立場から川上氏はこの方針を至上命令とし, 筆者(古賀)の立場もまったく同じである。参考として【表1】に主として補助符号を用いない翻字方を挙げたのもこの理由による。これは言語記号が線状的(linear)であることからくる必然的な要請でもある。

ここでいう補助符号とは, チェコ語で用いるハーチェック(ˇ)やフランス語の鋭アクセント(´)や曲アクセント(ˆ), 鈍アクセント(˘), 分音符(¨), また短音符(˘)やリガチュア(̆)など, ローマ字や音声記号に添えられて様々な機能をはたす符号のことである。もちろん現在の技術ならばいずれの補助符号も入出力できるだろうが, この(1)の考え方に従えば, ш(チャー)という字をハーチェック付きのshで表すよりはshという合字(1字に相当する2字)で表すほうが優れている。補助符号を用いることは下の(4)の方針から見れば逆に好ましくさえあるのだが, 大部分の人々がこれらの補助符号を入出力において容易に使える環境になく, 仮にそうした環境にあったとしても大部分の人々はそれを迷わず使いこなせるほど習熟していないことを私たちは知っている。今日まで多くの図書館で採用されてきた/されていると考えられる米国図書館協会・議会図書館方式(ALA-LC)はこの点に関して深刻な欠陥をはらんでいる。⁷ なお, 軟音記号bなどの翻字として用いられることがあるアポストロフィ(´)やプライム(´)は「補助符号」ではなく, この場合各ローマ字と同じ「記号」である。補助符号そのものを用いることと, ある字母を補助符号として用いるのとは異なる。

(2)は, ロシア字をローマ字に翻字した結果をあらためてロシア字に戻す場合, できれば対応表ひとつで誰もが迷わず容易に, しかるべきロシア字に戻すことのできる(reversible)翻字方式がよい翻字方式である, という思想である。例えばロシア字のc(エス)とt(テー)をそれぞれsおよびtとしたうえで, さらにu(ツェー)を合字tsによって翻字してしまうと, 逆にtsという文字列をロシア字に復元する際に, tcとuのどちらに戻せばよいのか分からなくなってしまう。またш(チャー)とч(チェー)をそれぞれshおよびchとしたうえで, さらにш(シチャー)を合字shchによって翻字してしまうと, 逆にshchという文字列はшчと変換されてしまうかもしれない。この点に関

して大英博物館方式 (BM) や、それに類するいくつかの方式は不備である。

(3)は翻字の考え方は音韻論的な観点からできるだけ構造的かつ体系的であるほうがよいという考え方である。例えばそり舌無声摩擦音/ʃ/を表す字母ш (シャー) を、合字 sh をもって翻字するのであれば、それに対立する有声音素/ʒ/を表す字母ж (ジェー) もまたハーチェックを用いた単一字母ž ではなく、やはり h を補助符号として用い、合字 zh をもって翻字するのが構造的であり、より好ましい、という考え方である。またいったん摩擦音において h を補助符号として用いたのであれば、破擦音を表す ч (チェー) を翻字する場合にも、č ではなく、やはり h を補助符号として用いて ch とするのが体系的であり、より好ましいと考えるわけである。

最後の(4)の方針は、あるロシア字を翻字する場合、その文字をできるだけ少ないローマ字で表すのがよいという考え方である。この考え方によれば、例えば x (ハー) は、k と h による合字 kh で表すよりは、ローマ字の x の 1 文字で表すほうが優れている。また、ш (シチャー) を 4 字の shch で表すよりは、通信理論から見て余剰 (無駄) である s と c を省いて hh の 2 字で表すほうが優れている (実際にヤコブソン [Jakobson 1971 (1965)] はそうしている)。いずれもスペースの節約に繋がるからである。また仮に音声的な側面を度外視できるとして、e (イエー) と э (エー) のそれぞれに e と ye のいずれをあてはめても構わないならば、э を ye と翻字するほうが優れている。e (イエー) よりも出現頻度の低い э (エー) に ye をあてがうほうが、入力の手間からみても、また出力されたスペースをみても節約になるからである。

もとより翻字を考える上で加味されるのは必ずしもこれらの方針だけではなく、さらに、もちろんそれぞれの方針は時に相矛盾するパラメータとしても作用するので、そのすべてを同時に完全に満たす翻字法はないと考えたほうがいだろう。本稿でいう「エレガント」とはこれらの方針をバランスよく満たしているという意味である。

1. 2. 翻字の設定

翻字の方針を概略了解したところで、次に川上氏の個々の翻字の検討に移ろう。表からも明らかだが è, й, х, ц, ш, ъ, ы, ъ, э, ю, я 以外の 22 字は川上氏の翻字法を含め、補助符号を用いないいずれの翻字法でも一致しており、私もこれらの翻字に間然するところがないため割愛する。

まず、川上氏は h というローマ字を一貫して補助符号として用い、この補助符号としての h に 2 つの異なる役割を与える。まず第 1 の役割は、そり舌摩擦音 ж (ジェー) および ш (シャー)、そして破擦音 ч (チェー) を表す際の補助符号として (それぞれ zh, sh, ch) の役割。第 2 の役割は、ロシア語 (およびロシア字) の特徴である硬母音字と軟母音字を表す際の硬母音性を表す補助符号としての役割である。

h を一貫して補助符号として用いることは(1)の条件を満足させる。また ж とそれに対応する ш に同一の補助符号を用いることはきわめて構造的であり、また同様に破擦音 ч を表す際の補助符号として用いることによって体系的性が保たれ、(3)の条件を満足させるこの h の用法は好ましい結果をもたらすだろう。

h の第 2 の役割について、川上氏自身次のように説明している。h と y を、それぞれ母音字母の「硬い」「軟らかい」という属性を表す符号として使うとして、⁸ まず(イ)のような翻字体系を考えてみる。(イ)の翻字は無駄を含んでいる。h か y のいずれかをすべて取り除いてしまっても区別に支障がないからである。だがそうした処理を急ぐ前に、それぞれの字母の頻度を加味し、(ロ)の下線を施した要素を取り除くほうが、使用頻度の面から見て有利であると考えられる。例えばロシア字の o と è では、後者のほうが頻度が低い以上、o : è を oh : o とするよりは o : yo とするほうが経済的である。その結果残るのが(イ)の川上式である。大胆かつ繊細、まことに鮮やかというほかない。

	硬母音字	ы	э	a	o	y
	軟母音字	и	e	я	ë	ю
(イ)	硬母音字	ih	eh	ah	oh	uh
	軟母音字	yi	ye	ya	yo	yu
(ロ)	硬母音字	ih	eh	<u>ah</u>	<u>oh</u>	<u>uh</u>
	軟母音字	<u>yi</u>	<u>ye</u>	ya	yo	yu
(ハ)	硬母音字	ih	eh	a	o	u
	軟母音字	i	e	ya	yo	yu

ж, ш, ч をそれぞれ zh, sh, ch と翻字することに関しては、実際に多くの翻字方式で用いられていることでもあり、(1)の方針さえ了承されるなら異論はまず考えにくい。出るとすればそれは今述べた部分、ы, э を ih, eh とする点に関する異論であろう。しかし э を eh とする案は早くも 1965 年にヤコブソンが提案し、

実際に国際原子力情報システム規格 (INIS) およびロシア国定規格 (GOST) で採用されている。⁹ 暗黙にせよ明示的にせよ、上に述べたのとほぼ同じ方針に従うならば、出てくる結論もまた同様のものになることは当然なのだが、逆に構造と体系の方針(3)と経済の方針(4)を尊重する立場から見れば、ヤコブソンが—шを大胆にも hh などと翻字してみせるヤコブソンが—ыを ih としなかったのは不徹底だったことになる。たしかにыを ih と表記するには最初は勇気が要るかもしれないが、しかしここにこそ他のいっさいのロシア字翻字法に対する川上式の有理性・優位性があり、私の考えではы=ih はけっして外すわけにはいかない「突破口」である。なお、ih と eh の h を hard (硬い) の意と理解できることは岡田秀穂氏の指摘のとおりである (岡田 1990)。

1. 3. その他の翻字について

次に x (ハー) と u (ツェー) につき、これをそれぞれ x と c とすることについては何の不都合もなく、シンプルかつエレガントなこの翻字を採らない建設的な根拠は見あたらない。ロシア字の x が表す音価は国際音声字母 (1993 年版) の [x] が表す音価にほぼ相当する。u については、これはポーランド語やチェコ語の c (ツェー) に対応し、その音価がまた一部で用いられる簡略音声表記の [c] が表す破擦音にほぼ相当する。かりに偶然の一致だとしても、この字形と音価の両面におよぶ近似を奇貨として活用しない法はない。

次に ш (シチャー) について。この字母を川上氏が q を利用して sq と記すのは、q がまだ未使用のまま残されている文字 (キー) であり、かつ中国語のローマ字表記 (ピンイン) で q が「日本語の「チ」の子音に非常に近い音を表すのに用いられ」るからである。これもまた川上氏の独創であり、きわめて巧妙である。氏も認めるとおり、たんなるコードとしては q の 1 字でも足りるのだが、氏は「余りにも発音からかけ離れている」ので s を添えたという。(4) の方針からみても q の 1 字で表すほうが優れているが、むしろ ш (チャー) と ш (シチャー) という字母の形状の相似 (左半分が同一) ないし平行性をそれぞれの字母の頭につく s で保たせる、という観点からも好ましいと思はれる。これはさらに、ロシア語を知っている人々の抵抗をより少なくするためにも得策であろう。ぜひとも採用したい。先にヤコブソンが ш を hh と翻字していることに触れたが、通信理論を偏重して無駄をそぎ落とすあまりロシア語既習者もつイメージとかけ離れてしまうことを私は危惧する。¹⁰

最後に軟音記号 ъ について、川上氏はこれに j をあてている。表からも明らかなように川上式とヤコブソン式の翻字法において j は 2 つの字母すなわち ÿ (短いイー) と軟音記号 ъ を表す。「j は子音字の直後ならば軟音符に、それ以外ならば ÿ に変換すること」さえ気をつけていれば、翻字の j を過たず ÿ なり ъ なりに変換できる、という考えにそれは基づいている。軟音記号 ъ をアポストロフィ (') ないしプライム (') で翻字する方式 (たとえば岡田氏 [岡田 1990] の提案する GS 方式) に川上氏は難色を示しているが、それは「とかく軟音符の軽視を招き、やがてはその無視にまで至る」という理由からである (川上 1990b)。

2. 小訂

2. 1. 軟音記号 ъ について

簡単ながら、上で川上式翻字法の要諦をいちおう説明したことにし、次に私の小訂案を述べておきたい。まず今述べた、ÿ (短いイー) と軟音記号 ъ の両者を同じ j で表すことに関して私は別の考え方を採りたいと思う。なるほど「j は子音字の直後ならば軟音符に、それ以外ならば ÿ に変換すること」という規則を当てはめれば、たちどころに正しいロシア字に変換できるのだから、なんら実際的な不都合はないが、これは翻字対応表といういわば「大原則」に但し書きという「細目」をつける方式であり、とかく「細目」なるものはその軽視を招き、やがては無視にまで至るのではないかと私は懼れる。原綴りと翻字の、操作の不要な 1 対 1 の対応をめざす立場から、かなうならば私は ÿ と軟音記号 ъ にも別の字母をあてたい。アポストロフィ (') ないしプライム (') は口蓋化音 (軟音) を表す音声記号として長く用いられ、ロシア本国の言語学界で定着している、という事情もあり、岡田氏が提案する GS 式に倣って入力にも便利なアポストロフィを軟音記号 ъ にあて、こんどは逆に、川上式でアポストロフィで表されている硬音記号 ъ に w をあてたい。

2. 2. 硬音記号 ъ について

硬音記号 ъ を w で表すやり方はヤコブソンの翻字で行われており、この点、私はヤコブソンのやり方が他のいずれの翻字よりも優れていると考える。¹¹ w が入力に便利な記号であり、かつ川上式の体系内でまだ使われていない、という理由のほかには私は次の点から見ても w がふさわしいと思う。すなわち、私は現代ロシア語において硬音記号 ъ という字母 (文字素) が表す硬音性には非口蓋音素 /w/ が該当し、この音素

ロシア字ローマ字化翻字法の標準化について

には軟口蓋半母音 [ɰ] が該当する、と解釈しているが(古賀 2000)、この [ɰ] という記号の形状は w に通じるものがあり、かつ w という字母が半母音としての音価を連想させることから、w を硬音記号 ѡ に用いることに多少の必然性があると思うのである。川上氏自身、「w」はむしろヤー氏【ヤコブソン—古賀】の第2案に従い、いざと言うときの硬音符号用にとっておくのがよいだろう」としている(川上 1990b)。川上式翻字法の硬音記号 ѡ に関して、他の方針からみて不都合がないかぎり、私はこの川上氏の別案を支持したいと思う。

なお、国際原子力情報システム規格 (INIS) やロシア国定規格 (GOST) では硬音記号 ѡ に右2重引用符 (”) をあてており、これも一案ではあるが、私はこれを左2重引用符 (“) とあわせて、ロシア語で引用符として用いられる左角引用符 («) と右角引用符 (») を「翻字」するのに残しておきたい(つまりロシア語の «および» は「ローマ字」でそれぞれ“および”となるわけだ)。

2. 3. 小訂別案

川上式翻字案における j と y については、これらをすべて互いに置き換えてもまったく不都合は生じない。川上式では、й を j としているため、я, ю, ё をそれぞれ ya, yu, yo としているが、й を y とするならば、同時に я, ю, ё をそれぞれ ja, ju, jo とするだけである。ここに至っては翻字を設定する側が決めるよりも、むしろロシア語を知らない人々の印象に基づく総意で決める以外にないと思う。ja と ya のいずれの翻字が「ヤー」という音を表す字母の翻字にふさわしいか。日本式、訓令式(国際標準規格)といった日本語の代表的ローマ字表記方式、さらにはそれらをはるかに上回る影響力を持つと思われる MS-IME (マイクロソフト社) や ATOK (ジャストシステム社) といった日本語入力方式でも、「や」「ゆ」「よ」はそれぞれ ya, yu, yo とされている以上、そのいずれかをすでに身につけている人ならば、おおよそ「ヤー」と読まれる字母 я に ja をあてることには抵抗が強く、я, ю, ё をそれぞれ ya, yu, yo とする方を採用のではないだろうか。もしそうならば、それを尊重(利用)して、同時にまた й を j のままにしておくのが順当だろう。

2. 4. 古字体の翻字について

最後に、川上氏が扱っていないロシア語古字体(1918年まで用いられていた)について、岡田秀穂氏の翻字を紹介しておこう(岡田〔1990〕の2.4節

「一部古字体の処理」)。

ѡ (ヤチ)	→	eq
ѧ (フィーダ)	→	fq
Ѩ (十のイー)	→	iq
ѩ (イジツァ)	→	iqq

ここでは岡田氏の翻字体系(GS式)において未使用の q を標識として用い、この q に「旧」や「quaint(古風な)」という含意をもたせている。ш (シチャー) を sq と翻字する川上式の立場からはどうであろうか。ここでもまた q は補助符号としての役割を持っているから、古字体の翻字にこのまま q を採り入れても不都合はないようである。そうすると q は ш (sq) の場合はたんなる符丁、他方は「古字体」の意となるが、川上式における補助符号としての h のように、二様の意味を持たせることは可能であり、積極的に支持したい。なおここで提案する体系内では、v (イジツァ) につき、古代教会スラヴ語における v (イジツァ) の、y に似た異体字と関連づけつつ GS 式の iqq を yq と縮めるのも一案かと思う。

【表2】本稿推奨のロシア字翻字法

	ロシア字	ローマ字			
1	А а	A a	18	Р р	R r
2	Б б	B b	19	С с	S s
3	В в	V v	20	Т т	T t
4	Г г	G g	21	У у	U u
5	Д д	D d	22	Ф ф	F f
6	Е е	E e	23	Х х	X x
7	Ё ё	Yo yo	24	Ц ц	C c
8	Ж ж	Zh zh	25	Ч ч	Ch ch
9	З з	Z z	26	Ш ш	Sh sh
10	И и	I i	27	Щ щ	Sq sq
11	Й й	J j	28	Ъ ъ	W w
12	К к	K k	29	Ы ы	Ih ih
13	Л л	L l	30	Ь ь	'
14	М м	M m	31	Э э	Eh eh
15	Н н	N n	32	Ю ю	Yu yu
16	О о	O o	33	Я я	Ya ya
17	П п	P p			

古賀義顕

горячо	поздравляю	желаю	здоровья	и	дальнейших
goryacho	pozdravlyayu	zhelayu	zdorov'ya	i	dal'nejshix
goryacho	pozdravlyayu	zhelayu	zdorov'ya	i	dal'nejshix
достижений	в	языкознании	и	поэтике	надеюсь
dostizhenij	v	yazihkoznanii	i	poehtike	nadeyusj
dostizhenij	v	yazihkoznanii	i	poehtike	nadeyus'
в	ближайшем	будущем	встретиться	в	связи
v	blizhajshem	budusqem	vstretit'sya	v	svyazi
v	blizhajshem	budusqem	vstretit'sya	v	svyazi
	с	предстоящим	славистическим	съездом	
	s	predstoyasqim	slavisticheskim	s'ezdom	
	s	predstoyasqim	slavisticheskim	swezdom	

おわりに

以上、贅言を弄したが、最終的に私は川上素教授の翻字方式に上の2点の変更(ь=w; ь=')を加えた【表2】の翻字法を推奨する。私はこの方式が日本ロシア文学会で認知され、まず日本で根づくよう願っている。どんな翻字法であれ、もちろん私たちはそれを強制できない。またこうした規格に関するかぎり、必ずしも合理的なものが普及するとはかぎらないという事実も私たちは経験から知っている。したがってけっきょくは個々人の判断に委ねればよいことであるのかもしれないが、本学会にかぎっては理不尽な旧習をしりぞけ、つねに合理的な考え方の発見と普及に尽力するものであってほしいし、また尽力するべきであろう。川上教授による画期的提案へのレビューとするには遅きに失すの感があるが、本学会による公式な翻字法制定への期待をこめ、¹²最後にヤコブソン論文末尾の祝電を正書法、川上式翻字法、および【表2】の翻字法によって記しておく。実際の使用例をご覧いただければ、新しい翻字法にさしたる痛痒を感じられることはないと信じる。実際に試用していただければなおさらである。

(こが よしあき, ロシア語学)

注

¹ これまで私は幾人かのロシア文化研究者にロシア字をどう翻字するのがよいかと訊かれたことがある。そのたびに私はいかねて自分でも使ってきた川上式翻字法を薦めてきたが、急ぐ先方の都合もあり、この翻字法の美点を翻字の原理にまで立ち戻って説明することはできなかった。今回あらためてロシア字の翻字のあり方に学会員諸賢の注意を促すことにしたのにはそうした事情もある。なお私は川上教授とは一面識もない。

² 翻字の大文字は省略する。より広範な調査比較は Wellisch (1977: 256-64) にある。国際原子力情報システム規格 (International Nuclear Information System) に関しては Wellisch (同所) を参照した。

³ ヤコブソン論文には2つの案が用意されており、ここで扱うのは、外観など美的な観点も含めて概して穏当なものとなっている第1の「半自動 полуавтоматизированная 翻字法」である。もう一方の方式は通信理論上不要なものを極力そぎ落としたいわばミニマルな翻字法であり、コンピュータによる処理などの観点から見れば大変興味深い翻字法であるとはいえ、公共使用への提供と普及をめざす本稿とは目的が異なるため、これについては別途扱うべきだろう。なおこの第2の翻字方式 (完全自動 всецело автоматизированная 翻字法) で ho と翻字される ё (ヨ) はここに掲げた第1の翻字法では特には設定されていない。e とするのだろう。

⁴ British Museum: 英国図書館 (British Library) 方式ともいい、翻字表は同図書館の公式サイトに掲載されている (<http://www.bl.uk/collections/slavonic/translit.html>)。この翻字表には「語末の iй および ий は y と翻字し、語末の ъий は uy と翻字する」という但し書きがつく。なお、インターネットの URL は以下すべて 2004 年 4 月末現在のものである。

⁵ American Library Association/Library of Congress: Randall K. Barry, Library of Congress と American Library Association (1997) による *Ala-Lc Romanization Tables: Transliteration Schemes for Non-Roman Scripts 1997* (Washington: Library of Congress) は参照できなかったが、同書のロシア字翻字対応表 (184-5 頁) が Library of Congress の公式サイトに掲載されており、今回はこれを参照した (<http://lcweb.loc.gov/catdir/cpsol/romanization/russian.pdf>)。なおこの翻字表には、硬音記号 ь は語末では翻字しない (無視する) 旨の但し書きがつく。

⁶ ГОСТ 7.79-2000 (ISO9-95): この規格の現物 (*Система стандартов по информации, библиотечному, издательскому делу. Правила транслитерации кирилловского письма латинским*

ロシア字ローマ字化翻字法の標準化について

- алфавитом*. Москва: ИПК Изд-во стандартов, 2002.) は未見だが、さいわい O. Dag 氏によるサイトにこの規格が紹介されており、今回はこれを参照した。O. Dag 氏に御礼申し述べたい。旧版 ГОСТ16876-71 (Транслитерация русских слов латинскими буквами) は Гиляревский и Старостин (1978: 225-7) に付録 (Приложение 1) として載っている。
- ⁷ 現に私は本稿の入稿に際しても、リガチュア (̂) は原稿に手書きした。またスラヴ諸言語の翻音・翻字方式を論じる中で、Cubberley (1993: 55) は "...though the Library of Congress system does use the ligature () 【ママ】 and breve (̂).” とし、補助符号を用いる方式がいかに不利であるかをはしなくも示している。
- ⁸ 「軟らかい」の記号として y ではなく j を用いることはできないかという疑問に関しては「2. 3. 小訂別案」を参照のこと。
- ⁹ ъ (エー) を eh と翻字したのはヤコブソンが初めてではないだろうか (未確認)。なお、川上氏はその翻字法を考案した時点ではヤコブソンの翻字法を参照していない。
- ¹⁰ ヤコブソンが意識していたかは不明だが、hh を上下逆に印刷すると、ш という字母の形状を思わせなくもない。ロシア国定規格 (GOST) でこの翻字に近いやり方 (shh) が採用されているのは注目に値する。
- ¹¹ ヤコブソンは硬音記号 ъ の翻字 w の別案を jh とし、その翻字方式における軟音記号 (j) の硬い (h) 対立物としている。きわめて構造的かつ音韻論的であると思う。
- ¹² もちろんこれは、国内で現在いかなる翻字が行われているかとは無関係に、学会が自らの基準を主体的に制定するという意味である。また、本学会で今後なんらかの議論が行われるとすれば、まず「公式な翻字法を制定するか否か」を協議し、「どのような翻字法をどのような方針

に基づいて公式なものとして認定するか」という議論はその後に行うべきであって、この2つの問題は区別されてよい。

参照文献

- 岡田秀穂 (1990) 「ロシア語の文字転写別案：既存の事実との調和を考慮して」、『音声学会会報』(全日本音声学者総合学会会報) 194: 1-14.
- 川上稔 (1990a) 「実用明解ロシア字ローマ字化案」、『音声学会会報』193: 18-21.
- 川上稔 (1990b) 「ロシア字ローマ字化私案の短所とも見える点について」、『音声学会会報』195: 29-32.
- 古賀義顕 (2000) 「現代ロシア語の母音体系：単音 [i] と [i̯] の構造的解釈」、『ロシア語ロシア文学研究』32: 1-16. (改訂ロシア語版は『スラヴ文化研究』(東京外国語大学ロシア東欧課程ロシア語研究室, 2001年) 1: 105-18.)
- Гиляревский, Руджеро С., Старостин, Борис А. (1978). *Иностранные имена и названия в русском тексте. Справочник*. 2-е изд. испр. и доп., Москва: Международные отношения.
- Якобсон, Роман (Jakobson, Roman) (1971[1965]). “О латинизации международных телеграмм на русском языке,” *Roman Jakobson. Selected Writings. I. Phonological Studies*. 2-nd. Expanded edition. 1971. The Hague; Paris: Mouton, 700-4.
- Cubberley, Paul (1993). “Alphabets and Transliteration,” in B. Comrie and G. G. Corbett, eds., *The Slavonic Languages*. London; New York: Routledge, 20-59.
- Wellisch, Hans Hanan (1977). *The Conversion of Scripts, its Nature, History and Utilization*. New York: Wiley.

古賀義顯

Йосиаки КОГА

О стандартизации транслитерации русских букв латинским алфавитом

В 1990 г. языковед-фонетист С. Каваками (Shin KAWAKAMI) предложил безупречную и изящную систему транслитерации русского письма латинскими буквами (*A Practical and Unambiguous Romanization of the Russian Alphabet // The Bulletin of The Phonetic Society of Japan*. 1990. No. 193. С. 18-21). В данной транслитерации интересно отметить следующие соответствия: $\ddot{e} = yo$, $ж = zh$, $\ddot{y} = j$, $x = x$, $ц = c$, $ч = ch$, $ш = sh$, $щ = sq$, $ъ = '$, $ы = ih$, $ь$ (только в положении после согласных букв) $= j$, $э = eh$, $ю = yu$, $я = ya$. Вопреки кажущейся необычности некоторых соответствий, система эта крайне рациональна. Так, она (1) не использует специальные диакритические знаки, которые нередко бывают причиной затруднений при вводе и выводе текста ($\ddot{e} = eh$, а не \acute{e} или \grave{e} и т.п.), (2) позволяет однозначно переводить кириллический текст в запись латинскими буквами и наоборот (так, $ц = c$, а не ts ; $щ = sq$, а не $shch$ и т.п.). При этом рассматриваемая система является не только (3) фонологически обоснованной и систематичной ($ы = ih$; $э = eh$, где те твердые гласные, которые употребляются реже, чем мягкие пары, обозначаются последовательно с помощью модификатора h), но и (4) экономной ($x = x$, а не kh и т.п.).

По мере технического развития типографии, становится все меньше случаев необходимости транслитерировать русские буквы латинскими, но все же пока такой способ передачи текстов используется довольно часто. Между тем, в Японской ассоциации русистов не было и нет научно обоснованной транслитерации — члены ассоциации вынуждены прибегать к тем или иным традиционным системам, имеющим порой серьезные недостатки. В настоящей работе предлагается принять систему транслитерации С. Каваками как стандартную транслитерацию Японской ассоциации русистов, внося при этом две следующие поправки. В системе Каваками \ddot{y} и $ь$ обозначаются одной и той же буквой j , которая интерпретируется в зависимости от контекста: после согласной — как $ь$, в остальных случаях как \ddot{y} . При таком обозначении приходится вводить дополнительное контекстное правило для перевода из транслитерации обратно в кириллицу. Автору кажется более целесообразным обозначать $ь$ апострофом, а \ddot{y} обозначать буквой w , оставшейся без употребления. Таким образом, будет обеспечена взаимная переводимость соответствий вне контекста. Так:

а	б	в	г	д	е	ё	ж	з	и	й	к	л	м	н	о	п	р	с	т	у	ф	х	ц	ч	ш	щ	ъ	ы	ь	э	ю	я
a	b	v	g	d	e	yo	zh	z	i	j	k	l	m	n	o	p	r	s	t	u	f	x	c	ch	sh	sq	w	ih	'	eh	yu	ya